

風土学的実践と〈縁結び〉

ミクロ・メゾ・マクロの三水準を貫く実践のカギは、他者といかに〈縁〉を結ぶかにある。
〈縁〉とは何か、いかに〈縁〉を結ぶか、を考える。

I 〈縁〉とは何か

○縁と因果

「因果」は一方的、〈縁起〉は相互的・同時的 →①

〈縁〉は主体的契機（自己）を含む。→②

○〈縁結び〉によって生じる責任（responsibility＝応答能力）

通常の倫理的「責任」は、〈一対一〉の関係によって閉じられるが、〈縁〉の及ぶ範囲は無限に開かれている。→③

II 〈縁〉をいかに結ぶか

○〈縁結び〉の二つの水準

(1) ミクロコスモスからメゾコスモスへ

「間柄」の倫理学 vs. 個の自覚に立つ倫理学 →④

〈縁結び〉は、二種の倫理学を必要とする。

(2) メゾコスモスからマクロコスモスへ

○「間風土的主体」としての〈個〉の実践

自己の風土（メゾコスモス）の外に出て〈出会い〉の場を開くのは、間風土的主体としての〈個〉。→⑤ これにより、〈ミクローメゾーマクロ〉を貫く風土学的実践が完結する。

[資料]

① 因果と縁起

「因果が一方的であるのに対し、縁起は交互的である。原因からは、結果が必然的かつ一方的に生じなければならない。親から子が生じるのであって、子から親が生まれることはない。しかし縁起の関係においては、一が他により、他が一に依存するという仕方で、関係は交互的である。その点に関して、自然現象の因果関係を時間的と考えるなら、縁起の関係は同時的であり、空間的であるという見方ができる」(木岡伸夫『〈あいだ〉を開く——レンマの地平』世界思想社、2014年、35頁)。

② 縁起における〈自己〉

- (a)「仏教においては、ほとんどの場面において、関係性をいい、縁を説くが、その際、つねに自己ないし自己の現実を一方の支とし、それに対する他支との縁—関係を考え、論ずる」(三枝充恵『縁起の思想』法蔵館、2000年、102頁)。
- (b)「行為が自己のものであれば、行為のあとの結果は自己と最も深い関係を有する。このような行為—結果—行為の一連のつながりが、すなわち業にほかならない」(同書112頁)。

③ 〈全体〉への責任

「しかし、一対一の対面状況で問われる責任が、当事者間で閉じられているのに対し、〈縁〉にかかわる責任は、自己を取り巻く不特定多数の相手に向けて開かれている。そうした意味での責任は……直接には、いまここにいる相手との応接に限られるとしても、間接的には、背後の他者「全体」との〈あいだ〉に成り立つ倫理的関係である」(木岡伸夫「〈縁〉の倫理」同編『〈縁〉と〈出会い〉の空間へ——都市の風土学12講』萌書房、2019年、57頁)。

④ 二種の倫理学

「個には、それを存在せしめる固有の本質が潜む。これが、西洋形而上学のゆるぎない立脚点である。この実体観のゆえに、「個」を起点とする関係構造を第二次的な構成物とする、「個人主義」の倫理学が成立しうる。それとは対照的に、個が実体的な本性(自性)を有さず、他との関係性(縁)によってのみその存在をしるしづける、という大乘仏教の空観に立った場合には、関係を結ぶ主体よりも、関係自体に重要性がある、という考えが成り立つ。和辻の展開する「間柄」の倫理学は、西洋では一般化したことのない後者の立場によって構築された、関係性重視の倫理学である」(木岡伸夫『邂逅の論理——〈縁〉の結ぶ世界へ』春秋社、2017年、142頁)。

⑤ 間風土的主体

「特定の風土に属しながら、その外に出て異なる風土の主体と出会うための〈あいだ〉(無からの場所)を切り開こうとする主体」(木岡伸夫『風土の論理——地理哲学への道』ミネルヴァ書房、2011年、350頁)。

[概要]

「環境の倫理」は、〈ミクロ・メゾ・マクロ〉の三つのスケールを結ぶ風土学的実践である（図示）。①中心である〈私〉（個）のあり方を整え、そこから②周囲の他者（地域）との絆を生み出し、最終的に③グローバルな環境（地球）を保全する取り組みに至る。「修身齊家治國平天下」（『大学』）。三つのスケールを統一するカギは、環境の中心を占める個の自覚。私が起点となる〈縁結び〉を、いかに広げるかが課題である——②→③が困難であることを述べたが、旧著の中ですでに一定の見通しをうちだしている（『風土の論理——地理哲学への道』ミネルヴァ書房、2011年）。それを、改めて〈縁結び〉という表現で説明したい。

1 〈縁〉とは何か

何かによって何かがあるという二者の関係。「因って」は因果、「縁って」は縁起の関係。（例：「親—子」）→① 仏教学者三枝の指摘——「縁」の関係支は〈自己〉。「業」の表す深淵。→② 〈縁結び〉は、自分に〈縁〉のある相手と自覚的に関係を結ぶことである。

〈縁〉から生じる「責任」——他者からの呼びかけに応えること。呼応を前提とする責任は、目の前の相手との一対一関係を越えて、背後の全体にかかわること。かつて、このような責任のあり方を「無限責任」と言ったが、その表現は誤解を招く。当面の相手に対する有限責任を果たすと同時に、それは潜在的に背後の〈全体〉へと開かれる点において「無限責任」でもある——有限と無限の〈あいだ〉。→③

II 〈縁〉をいかに結ぶか

「環境問題とは何か」（3月）では、「環境の倫理」を〈縁〉の問題に結びつけることをしなかった。『風土の論理』で区別した三つの空間——物語空間・社会空間・普遍空間——を、ミクロ・メゾ・マクロの各水準に見立てることによって、〈縁の倫理〉が適用できるということに、気がついた。〈縁結び〉は、これらの水準を結ぶための実践である。三つの水準を結びつける手順は、三とおり考えられる。

- ① 〈ミクロ→マクロ〉：メゾの水準を無視した場合、〈個〉と〈地球〉とを直接無媒介に結びつける非風土学的発想に陥る。環境倫理学の限界。
- ② 〈ミクロ→メゾ〉：「間柄」の成立するメゾコスモス、ローカルな〈地域〉の整備が、風土学的実践の中心テーマ。ただし、間柄＝縁を結ぶ主体が〈個〉であることから、「個の自覚に立つ倫理学」が要請される。
- ③ 〈メゾ→マクロ〉：風土の異なりを承認し合う〈個〉が、それぞれの風土から外に出て、〈出会い〉の場を開く「間風土的主体」となる。①との違いは、**風土の異なりを自覚した〈個〉**であること。→⑤

現在の国際情勢に照らしてみると、国家同士が敵対する中で、双方の陣営から国家的利害を超えた第三者的立場で「対話」を主導する自己犠牲的個（＝菩薩）が出現するなら、それこそ「間風土的主体」と呼ぶにふさわしい。